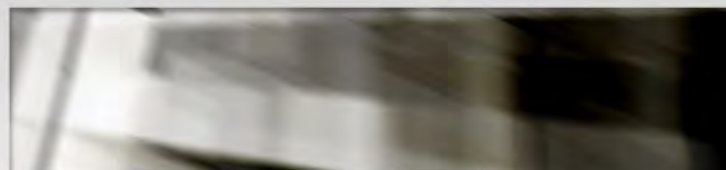


# FD

# 2011 京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —



*2011 Mutual Faculty Development*



2012年3月 京都大学FD研究検討委員会



- 京都大学FD研究検討委員会では、主催事業の一つとして、「公開授業・検討会」を開催しています。
- 公開授業・検討会は、
  - (1) 普段の授業の一コマを公開し、関心のある教員が傍聴する「公開授業」と、
  - (2) 当該授業のねらいや進行方法について振り返り、よりよい授業について互いに考え合う「検討会」との2部構成で実施しています。
- 公開授業・検討会は、高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた事業ですが、2008(平成20)年度からは本委員会の主催として年2~4回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。
- 2009(平成21)年度からは、これまでの公開授業・検討会に加え、文学研究科プレFDプロジェクトとして、同研究科のOD(オーバードクター)が担当する学部生向けゼミナールを公開し、授業終了後検討会をおこなっています。
- 2010(平成22)年度からは、本委員会主催による「勉強会」および高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーを実施しています。

## 京都大学のFDと相互研修型FD

FD研究検討委員会委員長  
高等教育研究開発推進センター長 田中 每実



京都大学ではFDに関する様々な取り組みがおこなわれています。本報告書はその一端を学内の皆様にご紹介するために、全学委員会であるFD研究検討委員会が毎年作成しているものです。

京都大学のFDのうち、最も歴史あるものの一つが本報告で取り上げている公開授業・検討会です。公開授業・検討会は、高等教育教授システム開発センター（現・高等教育研究開発推進センター）が全国の大学で初めて、1996年度から1999年度にかけて実施した、公開実験授業プロジェクトに端を発しています。

高等教育研究開発推進センターでは、設立以来、「相互研修型FD」を理念として活動を進めてきています。相互研修型FDとは、それぞれに固有の文脈に埋め込まれた自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団として形成されていくことをめざすものであり、従来わが国に見られがちだった、啓蒙型・操作型のFDとは対比的な考え方です。公開授業・検討会は、一つの授業を様々な分野の教員が集団的に検討する大学教員の相互研修と位置づけられるものであり、相互研修型FDの理念を具体化する重要な取組であると考えています。その意味で、公開授業・検討会が2008年度から全学委員会の下での事業として実施されることになったことには大きな意義があると思っています。

私自身、何度も授業を公開し、検討会で振り返りの時間を持った経験からして、大学の同僚でありプロである他の教員に対して授業を公開することには、並大抵ではない気構えが必要であることはよく承知しているつもりです。快く授業を公開して下さる数々の教員の方々の勇気とご協力に、改めて感謝と敬意を捧げたいと思います。

また、公開授業・検討会に参加される教員の方々にとっては、公開される授業が、ご自身の専門分野と直接的に関連していることは少ないと思いますが、全体のカリキュラムの中で授業をどう位置づけているか、学生との関係で授業をどう組み立てているか、学生の反応にどう対処しているか、といった視点で見えていくと、授業改善そして教育改善へのヒントが数多く得られると思います。そして何より、変わる学生を前にして、試行錯誤しながら授業に取り組んでいる多くの同僚と経験を共有できると思います。

なお、部局主催のFD事業でも、各教員からご自身の授業について紹介される機会が増えており、相互研修型FDの一環として注目しています。2009年度からは、本委員会と文学研究科との連携により、文学研究科プレFDプロジェクトをおこなっています。教員各位、またODなどの正規ファカルティ予備集団が自主的な授業改善・教育改善に向けて、こうした様々な機会を活用していただきますことを願っております。

さらに、昨年度(2010年度)からは、本委員会主催による「勉強会」および高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーが新たに実施されています。その詳細については本報告書にも掲載していますので、ぜひご参照ください。

京都大学のFDに関する取り組みは、いずれも研究大学としてふさわしい教育・研修プロジェクトです。学内でこうした自主的な授業改善・教育改善に向けた取り組みが、さらにひろがることを強く期待しています。

## ◇ 2011.7.12 火

公開授業 16:30~18:00 (吉田南構内 学術情報メディアセンター201教室)  
 検討会 18:15~19:15 (吉田南構内 学術情報メディアセンター1階会議室)

### 第1回 公開授業・検討会 「情報と教育」

全学共通教育科目A・B群



稲葉 利江子  
 (情報学研究科 特定講師)

## 1. 科目の概要

### (1) カリキュラム上の位置付け

本授業は、全学部の学生を対象として開講されている全学共通科目である。情報教育、教育の情報化などの基礎的知識を取り上げる内容であり、A群(人文科学系及び社会科学系科目)、B群(自然科学系科目)に含まれる。さらに、研究科横断型教育プログラムに登録された科目であり、大学院の学生も対象として開講されている。

(2) 授業形態	講義
(3) 単位数	2単位
(4) 対象学生	全回生および大学院生
(5) 受講者数	20名 - 30名

### (6) 授業のテーマと目的

情報化社会となった今、「社会」の中では様々な情報技術が利用され、多大な影響を及ぼしている。教育の分野においても情報教育という側面、また教育の情報化と例外ではない。本授業では、情報技術と教育との接点について、「e-Learning」、「e-exhibition」、「子どもと教育」を中心として取り上げる。講義、グループワークやコンテンツ教材作成実習を通じて、e-Learningやメディアコンテンツの現状、教育環境での情報技術を理解するとともに、インストラクショナル・デザインに基づく、教材設計の知識を習得することを目標とする。

### (7) 成績評価方法

期末レポート・課題の提出・日常点(毎回の授業後に提出する小レポート)

## 2. 公開授業

### (1) 授業計画上の位置付け

公開した授業は、第13回目の授業であった。Web教材作成の実習(2週)の後であり、「子どもと教育」のトピックの初回の授業である。そこで、初等中等教育における「情報科学教育」について学習指導要領、カリキュラムなどの現状を理解してもらい、その中で特徴的な情報教育活動を行っている事例として、コンピュータ・サイエンス・アンプラグド、Visual languageを取り上げた。

### (2) 公開授業の流れ

定員50名程度の中規模の演習室。前面には3面に分かれたスクリーンがあり、真ん中のスクリーンには講義スライドを、両端のスクリーンにはレスポンス・アナライザによる学生の応答を即時的に表示できるようになっている。学生はひとり一台iPod touchを受け取り、自由に着席する。受講生は学部生と大学院生の混合で、ほとんどは学部生(理学部・工学部・医学部)。大学院生は情報学研究科と人間・環境学研究科からの受講。

## 16:30 導入と準備

TAから今回の講義が公開授業であることについての説明があった。教室機材の不調のためスライドが使用できず、システムの再起動。その間、iPod touchの使い方の確認と、前々回・前回の講義(展示技術の基本)で出た質問への回答と復習。具体的には、テキスト論・書体・色彩(色弱者の色の見え方)・htmlファイルにおける画像形式などの点について回答。

## 16:55 子どもと教育

この講義内容の三本柱はe-learning、e-exhibition、子どもと教育であることを確認。今回の講義の焦点は3つめの子どもと(情報)教育。新学習指導要領で定められた情報科学教育とは、情報活用の実践力・情報の科学的な理解・情報社会に参画する態度の3点であることを確認。また、小学生や中学生の頃に、コンピュータを用いた授業はあったかどうかという問いかけがあった。学生の応答は、授業の中ではあまり多くは取り入れられてはいなかったというものが多数。

## 17:05 日本の現状と課題

日本において、情報教育は定着しておらず、系統立って教えられていない。専門の教員もおらず、授業数も減っているのが現状。情報教育の利点として、情報の仕組みについて理解すると、情報を正しく判断し、リスクを回避することに役立つ点について説明。また、アメリカや韓国など各国の取り組みについての紹介があった。

17:10 「遊びの中で学ぶ」  
(プリント配布・実習・机間巡視)

情報科学についてコンピュータを使わずに学ぶ「コンピュータ・サイエンス・アンプラグド」について説明後、具体的な課題の挙げられたワークシートを配布。実際にそれらの課題(数字から画像を起こすパズル)を解いてみる時間が5分間与えられ、教員はその間机間巡視。実習時間終了後は、情報を数値で伝達するメカニズムやFAXの圧縮技術について説明。

## 17:25 二度目の実習形式

先ほど配布されたワークシートの裏面を用いた、今回の講義中2度目の実習形式。「マザーグースの詩」を題材にしたテキスト圧縮技術(zip形式のファイル圧縮やgif形式の画像ファイル)の説明。コンピュータ・サイエンス・アンプラグドの特徴や意味について解説が行われ、子どもたちにも実習を通じて体感してもらうことによって興味・関心を引き出すことの重要性について説明があった。



## 17:40 動画視聴(1回目)

レゴ・マインドストームの紹介に関する動画の視聴。レゴ・マインドストームとは、レゴブロックで組み立てられたロボットを、プログラミングを行うことによって自由に動かすもので、子どもたちはかなりの興味を示す。一度喜びを知った子どもたちは誰に言われることなくともそれをやり続けるという「学ぶことを学ぶ」ことに関する解説。教師の役割とはあくまでファシリテータであるのかもしれないという指摘。

## 17:55 動画視聴(2回目)

日本のNPO法人パンゲアの取り組み「子どもが主役のIT農業支援」に関する動画の視聴(2回目)。ベトナムの農村地域において、農業従事者の子どもが、日本のNPO法人パンゲアが提供するシステムを利用して、日本の農業専門家とのコミュニケーションを仲介する取り組みについて紹介。稲作に関する情報を共有し、実際に、ベトナムにおける稲作の生産性や品質の改善につながった実績が評価されていることについて説明。

### 3. 検討会

◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員



◆ この授業は「情報と教育」というタイトルにもある通り、情報技術が教育の中でどのように活かされているのか、教育現場だけに限らず、博物館や美術館などさまざまな場面まで広げて、どのように情報が活用されているのか、またそれらがどのように教育されているのかといった点について、いろいろと事例を挙げながら紹介を行い、学生に教育における情報の位置付けについて考えてもらっている。また、この授業は、全学共通科目であると同時に、情報学研究科の提供している研究科横断型の授業にも位置づけられているので、受講者は学部生・大学院生が混ざっている。教室には3つのスクリーンがあるが、両端のスクリーンには、学生が分からないと感じた点について iPod touch から投稿があったものが表示される。教員はそれをリアルタイムに見ながらそれらに回答していくということもしているし、講義中に疑問点が解消したら学生はその質問を画面上から削除することもできる。昨年は質問が投稿できるタイプでなく、「わからない」か「おもしろい」という2つの選択肢でしか反応してもらうことができなかったが、具体的にどの部分が分からなかったのかをより詳細に把握するため今年のような形式に変更を行った。

◇ 前の2週にわたって実習を行ったとのことだったが、それはどのようなものか。

◆ この授業の3つの柱のうちのひとつである e-learning について、受けたことがあるという学生は多くいる。しかし、そういった受け身な e-learning ではなく、自分で誰かに教える教材を作成することを、インストラクショナル・デザインの観点も踏まえながら実習してもらった。

◇ 質問を投稿する担当は決められているのか。

◆ 誰でも質問を投稿できるということになっているが、周りが見ていると投稿しにくいという意見があったため、途中から「質問の投稿役」を示すカードを授業の最初に4-5名の人にランダムに渡している。

◆ 質問投稿に関しては学生の反応はさまざまであり、操作に慣れていて授業を聴くのにさまたげにならずにコミュニケーションが取れているという学生もいれば、質問投稿を行うことがノートをとることなど授業のさまたげになっていると感じる学生もいる。また、レスポンス・アナライザに投稿しにくい人は、授業終わりに記入する小レポートで質問するということも可能。質問投稿システムを用いると、即時的に教員とコミュニケーションが取れるので、授業の理解促進に役に立つという意見もあるが、一方で、すべての質問に答えられているわけではないので、もう少し質問に答える時間も作ってほしいという意見もある。なるべく多くの質問に答えようとは思っているが、授業の進行上難しい。

◇ 答えられなかった質問は次の時間の冒頭で答えるのか。

◆ まずはその場でできる限り答えられるように努力している。それでも答えられなかったものは、前回の授業の振り返りも兼ねて、質問に回答しながら前回の内容を思い出してもらうということを行っている。また、小レポートに記載された質問についても出来る限り次の授業の冒頭で触れて答えるようにしている。

◇ レスポンス・アナライザなどのシステムの開発や授業の準備はかなり大変だったと思う。しかし、今回の出席者は10数名だったので、双方向性ということ意識するのであれば直接やり取りすればよいのではないか。授業教材も数多く準備されていたが、手の込んだ準備が逆に学生の学びを妨げているということにはならないだろうか。

◆ 学生の中には「こんな質問をしてもよいのだろうか」と考える人もいるので、レスポンス・アナライザを用いて、匿名性をもたせて、質問をしやすくするという効果はある。一方で、質問の投稿・表示が聴講の妨げになると感じている学生もいるかもしれない。今年度は試験的な取り組みということで毎回アンケートをとって、これらのシステムがあったほうがよいのかないほうがよいのかデータを取っている段階である。

- ◇ 授業の構成・構造が分かりにくく、授業内でのメリハリが見えなかった。いろいろな実例をただ分らせてあげることが目的だったのか。
- ◆ 授業を作るときに何を参考にして何をトピックにしてどういう授業法を取ったらよいのか実際のところかなり困っている。そこで、MOST を活用させてもらって、授業で取り扱うべきトピックや構成について、同じような授業を担当されている先生からコメントをもらい、他の先生がどのような授業を行っているのかを学びながら、自分の授業を改善していきたいと考えている。授業のこの部分については盛り込みすぎであるとか、こういった点について帰結させたいのだがどのようにゴールまでもっていけばよいのかなど授業の構成については準備をしている段階においても自分の中でかなり葛藤がある。
- ◇ この授業は学部生から大学院生まで幅広く参加しているので、単純に1年生向け教養教育科目とは位置付けることは難しい。専門教育との結びつきなどの点において、先生はこの授業をどのように位置付けているのか。
- ◆ この授業には、文系・理系、学部生・大学院生と幅広く参加しているので、どこをターゲットに授業をすべきであるのか難しい。しかし、京都大学で情報と教育に関係する講義を検索すると、事例を多数紹介してそこから何かを学んでもらう授業がないように感じた。情報学研究科の院生にとっては、情報学と教育の結び付きは新しい観点を提供できていると思う。また、情報教育が初心者の学部生にも分かりやすく、数式などが登場しないテーマを選んでいる。
- ◇ アンケートでは、コミュニケーションが取れてよいという意見があったが、そこまで教員と学生がリアルタイムにコミュニケーションが取れているようには見えなかった。授業終わりのアンケートも含めてのコミュニケーションかなと感じた。であるならば、授業後のアンケートだけで十分ではないのか。授業中に思い付きで書く質問に意味はあるのか。学生は教員との双方向性を求めているということに改めて感じた。しかし、学生のほうも新しいメディアを用いてもそこまで積極的に用いるということはないように思う。新しいツールなので、どのように使えるのかはまだ試行錯誤の余地がありそうだ。
- ◇ レスポンス・アナライザはやはり「アナライザ」である必要があると思う。アメリカの事例を見ると、途中で教員が何らかの発問を行って、学生全員がそれに対して回答を行う投票システムとして活用されている。教員はその投票の結果を見て、授業の理解度や意見の違いなどを確認しながら授業を進めていくといった使い方がされている。主には多人数講義で用いられることが多い。今回の授業は少人数講義なので、あるひとりの学生の意見に縛られてしまうような危惧はないだろうか。レスポンス・アナライザの使い方として、今後、授業の途中で、進行の度合いを見るといったような使い方をされることはないか。
- ◆ 確かにレスポンス・アナライザをクリックカーのように用いることもできると思う。今のところは、質問の受付がメインの使い方になっている。ひとりの学生の意見に対して、他の学生はどれくらい興味を持っているのか、その答えを聞きたいと思っているのか、投票できるようにはなっている。そこで全体的な意見を把握したいと考えている。投票数なども見ながら、質問に対する投票が多いときにはなるべくその質問に答えるようにしている。逆に、個人的な意見であろうと思われるものや授業で狙っている趣旨とは外れるようなものについては授業中には特には取り扱わないようにしている。また、仮に投票数が少なかったとしても、授業で言いたいことに関わる質問であればなるべく拾うようにしている。
- ◇ 最初に振り返りから始まって、途中で実習も挟んで、学生の集中力を90分間もたせるような工夫と配慮が随所に見られた。素材もずいぶん選ばれていて、準備もしっかり行われていた。レスポンス・アナライザもふだんとは違うメディアを与えられることによって、出てくる質問も異なってくるのではないかという気もするし、大変新鮮であった。ふだんは質問をしない学生も、ふと前に表示されている質問を見ることによって、授業の流れをキャッチ・アップできたりするという役割もあるのではないか。非常に使えるメディアであると感じたが、京大生だからこそできるという側面もあるかもしれない。京大生はパラレルに課題を与えてもこなすことができるので。レスポンス・アナライザの投稿画面を表示するスクリーンが1秒ごとにリフレッシュして常時点滅しているように見えるのは改善の余地があるのではないか。
- ◇ シーモア・パパートについて少し触れられていたが、引用や書籍などを紹介はされないのか。

◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員

- ◆ もし時間があれば、パパートのインタビューの動画を流す予定だったが、冒頭に機材の不具合があったため、省かざるを得なかった。パパートについてより詳細に触れる予定が狂ってしまった。その点で授業の構成や流れが悪くなってしまった。
- ◇ 「遊びながら学ぶ」 ことについて3つの事例が紹介されていた。これらの事例は肯定的な評価を得ているものとして紹介されたと思うが、大学の授業でこういったことを扱っていく際に、否定的な側面やどんな批判があるのかといった点について視野に入っていると、これらの事例紹介が活きるのではないかと感じた。実際、これらの取り組みについて批判や限界は議論されているのだろうか。
- ◆ 前半で扱ったコンピュータ・サイエンス・アンブラグドは、例えば、情報処理学会では、理科離れなどの現状を考えて、どのようにそれを食い止めるのかについて議論が始まった段階である。論文や事例紹介を見ても、報告に終始しており、弊害などについての議論はまだないと思う。さまざまな側面からお話を作ったほうが学生にとって刺激があるのは確かなので、今後はそういった限界点や否定的な側面についての情報にもアンテナを伸ばしておきたい。
- ◇ 学習指導要領における情報科学教育の説明が少し分りにくかった。新しい学習指導要領の施行時期は小・中学校と高校は異なっているので少し整理が必要かもしれない。
- ◆ 正確に伝えるために再度確認する。
- ◇ 情報倫理やネットいじめなど、情報の否定的な側面について、この授業の中では扱われているか。
- ◆ ネットいじめを具体的に取り上げることはなかったが、情報の法律に関する問題と情報セキュリティについては扱っている。
- ◇ 文科省が言うところの情報教育と対比される形で、遊びの中で学ぶということが紹介されていたが、これは正しいかどうか疑問を感じた。



- ◇ 子どもたちの情報教育を考える際のネガティブな側面については、「滅びゆく思考力」など、アメリカでは既に随分議論されていることなので、それらを紹介することがあってもよい。Edutainment が奏功するのはどの部分なのか。学びを通じておもしろいと感じることが他の学びにも一般化するということはあるが、そういった刺激が無いときに学校で教科書を前に勉強する際に学びの効果が得られないという逆効果もある。「情報と教育」というテーマに照らして、メディアを通じた学習の問題点についても議論できると興味深い。
- ◇ 今日のように機材のトラブルが発生したときには何もできないのか。何か他にスライドがなくてもできるものは用意していないのか。
- ◆ 今日はプロジェクタとスライドありきで考えすぎていた。機材の不具合に備えたバックアップ・プランは用意しておかないといけないと感じた。学生からはスライドを授業の最初に配ってほしいという意見もあったが、あえて配っていなかった。しかし、配布用にハンドアウトも用意しておく、こういった事態に対処できたかもしれない。
- ◇ TAとして授業に参加しながら、学生に質問を促す意味合いも込めて、自分も質問をしてみたりしている。こういった質問が来たら授業がおもしろくなるのかという観点で見ていた。質問として、「×× はどういう意味ですか」「×× の部分が分りにくかった」という質問が多いのだが、おもしろいと感じる質問は、教員のしゃべった内容に対する疑問や批判。「×× は本当にそうなのですか」「×× は効果はあるのですか」という少し疑った意見はおもしろいと感じるので、こういった意見を拾い上げながら、授業を展開できたら、レスポンス・アナライザを議論のツールとして使用することができるのではないかと。



- ◇ 簡単な質問であれば手を挙げて質問すればよい。匿名性を確保してあげないと学生が発言しないからこういったツールを開発する。そうすると、こういったツールに頼って、ツールが無いときには質問できなくなってしまう、というジレンマを感じる。
- ◆ レスpons・アナライザのようなツールは用意しつつも、授業の区切り区切りで「質問はありませんか」と尋ねるようにはしているが、なかなか学生からの反応は得られない。レスpons・アナライザで出た質問に対して答えるにしても、誰がした質問なのかは教員には分からない。学生のほうを見て回答はしているが、その質問をした人の実際の反応は分からないままなので、難しさを感じる。
- ◇ 「この質問は誰がしてくれたのか？」というのは聞きにくいのか。
- ◆ 時々には学生に尋ねてみたりはするのだが、反応のある場合とない場合がある。学生によっては、レスpons・アナライザでも小レポートでも質問をせずに、授業後に教員のところにやってきて質問をするというケースもある。
- ◇ 授業中に質問をすることを促してそれをふだんからやっておくと、次第にそれが当たり前ようになって、授業中でもわりと質問をしてくれるようになる。
- ◆ 学生に意見を求めるようにはしているが、学生によって反応に個人差が大きい。
- ◇ 統計の授業を担当していると、「自分だけが分かっていないのではないのか」という心情から質問が出にくい。レスpons・アナライザに関して、これまでいろいろとデータを取られていると思うので、授業を研究対象として試行錯誤を繰り返して使用方法を洗練していって欲しい。
- ◆ 自分の授業は、いくつかの事例を紹介しながら進めていくものだが、こういう講義におけるレスpons・アナライザの使われ方と、統計・数学・情報処理など別のタイプの講義で、授業の種類によってレスpons・アナライザの使われ方は異なるのではないのか、学生の反応の仕方も異なるのではないのかと感ずるので、どういう授業ではこれが有効なのか有効ではないのか、どういうような機能が活きるのか今後比較してみたい。

#### 4. 公開授業担当教員のコメント

授業をどのように構成し、組み立てていけばいいのかと悩みつつ、開講して2年目の授業でした。公開授業のお話を頂戴したときは、果たして試行錯誤している今の授業を見ていただいて良いのかという不安もありましたが、この時期だからこそ、教育を専門とする先生方の意見を伺えてよかったと感じています。

授業の振り返りを MOST を使わせていただきながら行ったり、教授法などの書籍を手にしながら取り組んでいますが、今回は、他の先生方からの意見を直接伺うことができ、多視点で授業を振り返ることができ、今後の授業をどう作っていくのかという点を再度考える機会となりました。

また、スライドやコンテンツ、情報機器があって成立する授業計画になっていたのも反省点でした。不慮のトラブル等でプロジェクトなどが使えない時に授業は成立するのか、その点も考えながら、自分なりの授業を検討していきたいと思っています。

授業者として今回は、公開授業に参加させていただきましたが、次回以降は、是非、他の先生方がどのような授業をされているのか、どのような工夫をされているのか、聴講者として勉強させていただきたいと感じました。

最後に、公開授業をアレンジしていただき、公開授業・検討会にて貴重なご意見をいただきました高等教育研究開発推進センターの先生方に感謝致します。



## ◇ 2011.11.1 火

公開授業 10:30~12:00 (吉田南構内 吉田南1号館1共23教室)

検討会 12:15~13:15 (吉田南構内 吉田南1号館201)

第2回 公開授業・検討会

# 「音響心理学概論」

全学共通科目A・B群



酒井 博之

(高等教育研究開発推進センター 特定准教授)

## 1. 科目の概要

### (1) カリキュラム上の位置付け

本授業は全学部の学生を対象とした全学共通科目として開講している。全学共通科目は、A群（人文・社会科学系）、B群（自然科学系）、C群（外国語）、D群（保健体育）、EX群（大学コンソーシアム京都単位互換）の5群に区分されているが、本授業は、音響の物理的・心理的側面の基礎知識を扱うもので、A・B群の両要素が含まれるため「A・B群」として提供している。

(2) 授業形態	講義
(3) 単位数	2単位
(4) 対象学生	全回生
(5) 受講者数	25名

### (6) 授業のテーマと目的

音が聴こえるという現象を、聴覚心理学の知見にもとづき概説する。主要な音響心理現象について音の物理的性質と主観的性質の関連について学び、さらに実際の音響空間などへの適用例を扱う。

### (7) 成績評価方法

グループワークの発表内容と成果物、期末レポート、出席状況を総合的に評価する。

## 2. 公開授業

### (1) 授業計画上の位置付け

公開した授業は第4回目の授業であった。初回のガイダンスに続き、過去2回の授業では、音響心理学を学ぶ前提となる「音の物理的性質」「聴覚系の構造と機能」の基礎的内容を扱った。今回の授業の前半は「聴覚系の構造と機能」の残りの内容を、後半より「音の大きさの知覚」を題材に音響心理学の導入となる内容を扱った。

### (2) 公開授業の流れ

定員25名程度の小規模な演習室。机は三つのブロックに配置され、学生は各ブロックに分かれて自由に着席する。パワーポイントスライドと音素材を使用し、スライドを印刷した資料、スライド内の図表を拡大した資料を配布。当日の出席した学生は19名で、内訳は、1回生17名、2回生、3回生がそれぞれ1名であった。

#### 10:30 導入：前回の復習

聴覚系の構造と機能に関する前回の授業内容について、蝸牛の機能、特に基底膜上の進行波の周波数による違いについて復習した。また、前回のリフレクションシートで学生より質問があった、周期的複合音を刺激とした際の進行波の特徴について補足した。この際、刺激となるパルス列のスペクトルをスライドで示すとともに、その音源を再生した。

### 10:40 聴覚系の構造と機能

聴覚系の構造と機能に関する内容のうち、内耳から聴神経に信号が伝達されるまでのメカニズムが本日の最初のトピックであることを提示した後、蝸牛内のコルチ器の構造について説明を行った。有毛細胞の機能ならびに役割が示された後、蝸牛の生理状態の把握にも用いられる蝸牛エコーについて言及がなされた。また、これに関連する結合音と耳鳴りという二つの現象についても触れられた。

★ 配布資料は、いくつかのキーワードが穴埋め式になっており、授業を聞きながら手元の資料に書き込むことによって、説明を完成させるようになっている。

### 10:54 聴神経活動の3つの特徴

聴神経活動の3つの特徴(1.自発性放電 2.周波数選択性 3.位相固定)がスライドで示され、それぞれについて解説が行われた。第二の周波数選択性の説明の中では、単一神経線維の周波数特性を調べるための刺激として用いられるトーンバーストを再生した。

### 11:14 複合音による刺激と2音抑圧

ここで一度授業を区切り、質問を募った。次いで、それまでの聴神経活動の特徴が、純音に対する反応によって解明されたものであることを示した上で、複数刺激を同時に入力した場合の反応についてはどのように理解されるかという問題が提示された。こうした複雑な刺激に対する聴神経反応を調べるためには、ニューロンの反応を直接観察する必要があることが強調された。そして、2音抑圧の現象が説明され、特徴周波数に一致する純音とそれ以外の純音を同時に入力した場合の単一神経線維の反応の変化について説明がなされた。複合刺激に対する神経線維の反応にはいくつかのパターンがあり、2音の周波数差や神経線維の応答野との関係で決定されるものの、聴覚系高次レベルにおけるニューロンの反応の仕組みについては未解明の部分が多いことが述べられた。以上で聴覚機能についての説明が終了した。



### 11:25 音の心理的性質について

スライドを印刷した資料が新たに配布され、後半は音の心理的性質について、特に音の大きさの知覚を題材にして考察すると説明がなされた。音の大きさとは「ある音の感覚的な大きさを表す心理尺度」であり、デシベル単位で表される物理量とは異なり、主観的な量なので直接測定は不可能であることが述べられた。そして、音の大きさを「強さ」や「周波数」といった客観的量といかに関連づけるかという問題が提示された。まず、検知可能な音の最小レベル(絶対閾)を測定する必要性とその測定手段(無響室、ヘッドフォン)が紹介された。その後、音の大きさのレベルを純音の強さと周波数の関連で表す phon という単位が音の大きさの尺度として示された。それをグラフにした等感曲線がスライドで示され、そこから読み取れる人間の聴覚の特徴について、学生へ質問を投げかけつつまとめられた。

### 11:44 純音の再生と聞き取り

授業の最後に、実際に7種類の異なる周波数の純音を聞いた。それぞれの音が短く10回ずつ鳴らされ、一回ごとに音圧レベルが5 dB ずつ減衰していく。学生は各周波数について聞き取れた回数を記録し、すべての周波数の聞き取りが終わった際に、各周波数の平均聞き取り回数がまとめられた。そうして明らかになった出席者の平均値が等感曲線と合致することを確認した後、本日の授業は終了した。

★ 聞き取りをさせ、手を動かすことで、授業内容が学生自身の体験と結び付けられ、一層理解が深まったように思われる。

### 3. 検討会

◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員



- ◆ この授業は受講者数を25名に制限している。制限理由は二つあり、まず、授業内でおこなうグループワークの発表に十分な時間を確保するため、第二に、音を再生する際に広い教室では音が正確に伝わらないためである。履修者は、初回のガイダンスで課したレポートを元に出発する。今年は100名の履修希望者がいた。レポートの着眼点のよさを基準に選抜するが、25名に絞るのは非常に難しく、来年度は履修枠の拡大を考えている。受講者はほとんどが一回生で、二回生が2名、三回生が1名で、所属は文系理系問わず幅広い。授業の内容上、高校での物理や生物の履修経験は重要な要素なので、初回のレポート時にアンケートを取っている。両科目とも受講者25名中16名が履修していた。既習学生と未習学生の差をどうやって埋めるかが授業序盤の課題である。特に両科目とも履修していない学生からは進捗が早いと指摘されることがある。
- ◇ この授業をそれ自体で完結する教養科目と考えているのか、それともこれ以降の専門的な学習につながる科目と考えているのか。
- ◆ 私の元々の専門は建築音響だが、音響学の基礎知識は研究室に入ってから自分で学ばなければならなかった。この種の授業は学部や学科では開講しにくく、教養レベルでこうした授業があればいいと考えた。工学部に限らず、情報学、教育学部や文学部の心理学分野、医学部などでも音に関わる研究分野があり、分野を問わず将来音に関わる研究を希望する学生を対象としたいと考えている。実際の実受講者は、音楽サークルに所属していたり楽器経験者が多い傾向にある。
- ◇ 4回目の授業であれほど高度な説明ができるのはすごいと思った。前の授業での準備がよくなされていると感じた。ただ、専門用語の多用は学生の理解を妨げる面もあり、復習に時間がかかる要因にもなるので、期末のグループワークに向けて何が必要かという視点で内容を見直すことも考えるべきではないか。
- ◇ 技術的な指摘だが、レーザーポインタでスライドの一部を指している時、学生がスライドを見ずに手元を見ているのが気になった。
- ◆ パワーポイントを見ていない学生には気づいていたが、机上の配布資料を見ている学生にもどこを指しているかわかるような話し方を心がけている。専門用語については、音に興味・関心のある学生が集まっているので、なんとか理解しようと努力する学生の割合が多いと感じる。また、今年から、グループワークで扱うテーマなどについて学生間で議論する時間を設けることにした。学生同士のつながりができ、互いの関心事やわからなかった内容なども確認でき、グループワークに向けての下準備となっていると思われる。
- ◇ シラバスには教科書なしと書かれているが、学生に参考文献などの提示は行っていないのか。やはり授業のレジュメだけでは理解が難しいので、テキストがある方が良いのではないか。
- ◆ 授業のベースとなっている教科書は、内容が若干古く高価なこともあり購入は求めていない。基本的な文献一覧は学生に配布している。
- ◇ グループワークでは何をするのか。
- ◆ 学生たちが興味のある音響的事象を、それまでに学んできた音響心理学的知見と関連づけながら調べ、最後に教室で発表してもらう。昨年は、教員からいくつかテーマ案を提供した上で、学生にも議論させて扱いたいテーマを挙げてもらった。例えば、昨年は「残響感」について調査するグループがあった。昨年は発表に向けたグループワークに2週分をあてたが、今年は3週に増やした。グループワークは教室外で作業を行ってもいいと伝えているが、大半のグループが教室で作業する。グループワークの際、つまずいたり、内容を誤って理解している場合には、適宜助言したり、資料を与えたりする。
- ◇ 資料は教師が準備するのか。
- ◆ テーマごとに教員側でいくつか書籍や解説論文を用意するが、学生が図書館で借りたり購入する場合もある。音の編集ソフトを持っている学生が、自分で音サンプルを作成する場合もある。
- ◇ 一番感心したのは、構成がはっきりしており、話し方が整然としている点。気になったのは、小さいことではあるが、スライドを見ていない学生がいるのは、授業者としての酒井先生の意図がはっきりしていないからでは

ないか。やはり見てほしいと思うし、見なければ教科書もなく、理解のためにはレジュメだけではわからない部分もあると思う。そういう意味では学生がスライドを見るために仕向けなければならないのではないか。解決策としては、学生にスライドを見るように繰り返し言うことだろう。また、教室の構造上スライドに背を向けて座る学生が出てくるが、スライドを見るために振り向かねばならず、後半になると疲れてきたのか振り向かなくなっていた。もう少し工夫ができるのではないか。

- ◇ 私も同様にあの教室を使っていたが、机の配置を変更することで対応できるのではないか。見る方向に体を向けなければやはり難しいと思う。
- ◇ 20人ぐらいの学生数の割には質問などへの反応が悪い。もっとプレッシャーをかけるべきではないか。
- ◆ 確かにもっとプレッシャーをかけた方がいいかもしれない。机の配置に関しては、学生からも同様の指摘があり、来週以降対応したい。
- ◇ グループワークの存在によって、教養教育の枠を超えて、入門的な知識を与えるだけでなく専門的な学習へとつながる面もあるのかもしれない。教養教育と専門教育の両方を狙わざるを得ないのかもしれない。
- ◆ グループワークについては、将来研究者になるにしろ企業に就職するにしろ必要な能力を養う機会であることを初回の授業で説明している。
- ◇ パワーポイントのスライドをわかりやすくするために、内容の構造、階層を番号付けなどによって明確にすべきではないか。スライドだけでは階層性が消えてしまう。それから、問いを持ちながら授業を聞きにくいのではないかという印象を持った。たとえば最後の聞き取り実験をもう少し前に行って、どうして音がそのように聞こえるかという問いを与えてから説明に入ったなら、聴覚的な現象の説明というグループワークでやらせようとしていることのモデルになったのではないか。聴覚系の現象を説明するために聴覚系の構造と機能のような基礎知識が必要であるという、より大きな枠組みに授業を位置づけることが必要であると思われる。ガイダンスでこうした説明があったのかもしれないが、今回のみ参加したわれわれにとっては、専門知識の羅列でついていきにくい面もあった。
- ◆ 階層性については取り立てて考えたことがなかった。ある教科書に沿って資料作成をしているので、自然と構造化されている面もあると思う。内容の構成について、

スライドの中で逐次まとめているつもりではあるが、それが学生に伝わっているかは確かではない。今後、項目への番号付けなど工夫してみたい。ガイダンスで授業全体の構成については説明している。今回の授業は、前回の授業内容と連続しており、その流れでストーリーはあると思う。最初に問いを与えるという方法については今後は是非考えてみたいと思う。

- ◇ 工学部基礎系の授業では黒板の左に授業の構成・目次を予め書き出しておいて、今何をしているのかが全体との関係で、一目でわかるようにしているものもある。
- ◇ 授業者は教科書を見ているから構造はわかっているが、学生にとっては並列的になってしまうおそれもある。
- ◇ 「この部分は今後の授業で別途触れます」「これは以前やりました」というコメントが時々あったが、もう少し詳細を教えてもらった方がわかりやすいし、いつの授業でどのように言及されたかに説明を加えてもらった方が授業の構造が理解できるのではないか。
- ◆ 以降の授業で一コマ分を割いて説明する内容などもあり、今日は簡単に言及するだけで終わったが、過去の内容の復習も含めもう少し詳細に触れることを心がけたい。
- ◇ 専門につなげるというのなら内容が軽いようにも思われるがどうか。ここから積み上げるわけでもないのではないか。
- ◆ 確かにその通りだが、基礎的な知識を習得していれば専門に上がった時に楽ではないかと思う。
- ◇ レジュメのプリントにいくつか穴埋めの箇所があったが、どのような意図で穴埋めになっているのか、そして穴埋め箇所の重要性はどれほどのものか。



◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員

- ◆ 手を動かしてもらい、集中力を切らさないことが目的である。配布資料の別の箇所に解答が載っていることもあり、聞き逃してもそれほど大変ではない。もちろんキーワードが穴埋めになっているので、その用語に注意を向けてもらえればと考えている。
- ◇ 授業の区切りなどで質問があるか聞いているが、実際質問は来るのか。
- ◆ 今年は授業中に質問されることはほとんどないが、リフレクションシートに質問が記入されていることが多い。個別の質問はシート上に回答し、翌週返却している。
- ◇ 落ち着いた話しぶりでスピードと声の大きさが非常によかった。パワーポイントも整然としていた。構成が多少わかりにくい面もあったが、全体としてよくまとまっていたと思う。ただ、もう少し全体の起承転結、構成を最初に明らかにした方がいいのではないか。学生の食いつきが悪いという意見もあったが、いくつかのヒントがあったと思う。たとえば、無響室の写真を見せた時には学生はかなり引き込まれていたし、その後質問にも挙手があった。明らかに学生が聞きたいことだと思ったので、もう少し詳細な説明をしてもよかったかもしれない。また、バンドをしているなどの学生個々人のプロフィールを教員が把握しているのだから、そうした生活レベルに結び付けて話をすることも知識を経験に役立てるという意味で有意義ではないか。20人ぐらいであればこうしたことも容易ではないかと思う。
- ◆ 無響室内の体験については、とっさに言葉が出てこず簡潔な説明になってしまった。学生の経験への結び付けに関しては、等感曲線に関する内容のところ、音楽を聴くときに低音を増幅する理由について話そうと考えていたが忘れていた。
- ◇ 少人数の授業なので、もう少し学生とのインタラクションがあればと感じた。たとえばリフレクションシートの現物を見せながら前週の質問に答えるなどすれば、書いた内容を忘れていた学生の記憶を喚起する手段にもなるし、教師が学生をよく見ていることをわかってもらうことにもつながる。それから最後の音を聴く実験の時に教室が盛り上がったと思うが、実験の後でもう一度結果を学生と議論する時間を設ければ、全体の振り返りになったのではないか。
- ◇ 専門用語を学生がどれくらい理解しているのかが気になった。例えば音像という言葉もわかっているかどうか定かではないという気がした。

◇ 「過大な音」という表現も学生に理解されていたのだろうか。

- ◆ これまでの授業で、音圧レベルを測定しながら実際に音を聴いて、それが何デシベルぐらいかを体験させているので、「過大な音」についてはある程度理解されていると思う。「音像」に関しては空間知覚の内容で、後日扱う用語だが、自分でもしまったと思った。言い換えなどをしてみたが学生には伝わっていないように感じた。



#### 4. 公開授業担当教員のコメント

これまで京大以外での授業経験はありましたが、この授業は私が京大で初めて担当する授業で、今年で2年目となります。公開した授業は、音の三属性に関する導入部分を扱う予定でしたが、それ以前の授業の進度が遅れたために、前半部分は聴覚の機能に関するやや難解で一方的なものとなってしまいました。専門分野が異なる先生方に参観して頂いたので、授業内容以外の側面がより見え易い回を公開すれば、より多くの課題が抽出されたかも知れないと少し反省しています。

この授業をデザインするにあたって、他大学とはレベルや質の異なる京大生に対してどのような内容や構成とすればよいのか、最近の大学授業に求められる「双方向性」や「能動性」などの要素をどう授業に組み込んでいくのか、この授業はカリキュラム(全学共通科目)の中でどう位置づけられるのか、といった様々な個人的課題がありました。検討会では、以前から自分が抱えていたこのような課題に対して、参観者から直接意見を伺うことができたほか、授業の中で、自分では気づかなかった点、見落としていた点、手を抜いていた点など、多くの指摘や意見を頂くことができました。また、検討会の議論中、それらを言語化していく過程で、自分の考えや意図などが整理されることもありました。

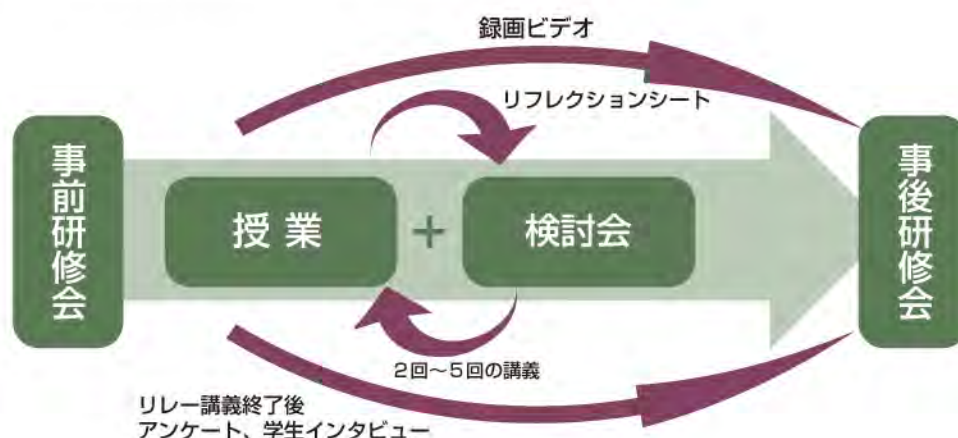
今回の公開授業は、自分の授業や授業に対する考えを振り返る貴重な機会となりました。この経験で得られた課題は、今後の授業の見直しや改善に活かしたいと思います。

## プレFDとは？

プレFDとは PFF (Preparing Future Faculty) プログラムとも呼ばれ、大学教員のキャリアに向けて大学院生（主に博士課程学生。ポスドクも含む）を準備させることです。日本国内でも、研究大学を中心として近年様々な取り組みが見られます。大学教員の職務を教育、研究、社会貢献、管理・運営に分類した場合、プレFDは本来、それぞれの役割に関する理解、知識や技術の獲得、あるいは意欲や信念の醸成などをめざすものですが、近年では、とりわけ大学教育への準備を意図した取り組みが多くなっています。本学での取り組みもその一つです。

## 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する文学研究科のオーバードクター(OD)によるリレー講義形式のゼミナールであり、事前研修会、公開授業とその検討会、そして年度末の事後研修会によって構成されています。具体的には、全ての授業を公開とし、毎回の授業終了後20分程度の授業検討会を行います。一人の講師は2回から5回の授業を行い、自分の授業が無い時には他の講師の授業を参観、検討会への参加という形でゼミナールに参加します。そして、全ての授業が終了した段階で事後研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る作業を行います。この一連の流れが文学研究科プレFDプロジェクトです。



図：文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

## 2011年度文学研究科プレFDプロジェクトを振り返って

もともと文学部はFDという発想にはなじみにくいところだった。元来が少人数教育の場であり、技術的な問題を度外視してしまうのが文学部的だったのである。研究者としての自覚が教育者としての自覚をうまく育てなかった、またそれでよしとしてきたのが文学部である。

こうしたなかFDが、しかもよそに例のないプレFDという形態で文学部を舞台にして毎年実施されているのは、初年度において制度設計をされた文学部側出口康夫先生と高等教育研究開発センターの先生方の英知の賜物であり、日々の運用を支えてくれる教務補佐員たちの有能さのおかげだというほかない。縁あって初年度以来見守ってきた私にとっては自分にもっとも欠けているものに直面する思いであった。真剣に準備し授業するODたち、かなり難しい講義に「先輩を鍛える」ために出席し、毎回リフレクション・シートを書き、時にはインタビューに応じる学部生たち、これはなかなか感動的な光景である。ぜひ参観していただくことをお勧めする次第である。

(文学研究科教授 福谷茂)



文学研究科教授 福谷 茂

## 2011年度文学研究科プレFDプロジェクトスケジュールと授業テーマ

### ■前期スケジュール

文学研究科プレFDプロジェクト事前研修会  
2011年4月4日 14:00～15:00 京都大学文学部東館

■哲学基礎文科系ゼミナール  
2011年4月21日～7月14日、毎週木曜日2時限  
検討会 12:00～12:20

■授業テーマ■  
呉羽 真 心はどこにあるのか：認知哲学入門  
周藤多紀 西洋中世における「嘘」西洋中世言語思想入門  
杉本俊介 「ビジネスにおける道徳」とは何か：ビジネス倫理学入門  
鄭 賢娥 1950年代日本のリアリズム絵画—リアリズムの本質とその可能性

■基礎現代文化学系ゼミナール  
2011年4月14日～7月28日 毎週木曜日5時限 16:30～18:00  
検討会 18:00～18:20

■授業テーマ■  
井上 治 近代日本における芸道思想の展開  
川崎 陽 植民地朝鮮と戦争動員  
佐藤夏樹 ラティノーアイデンティティの形成  
溝上宏美 イングランド女性は移民をどうとらえたか？—多文化化するイギリスと自己像の変容  
網谷裕一 理性と進化

### ■後期スケジュール

■行動・環境文化学系ゼミナール  
2011年10月6日～2012年2月2日 毎週木曜日1時限  
検討会 10:20～10:40

■授業テーマ■  
松本 亮 言語類型論(1)、(2)  
江南健志 山村の社会学(1)、(2)  
シルビア・スタニアク 意味論と語用論(1)、(2)  
山本理子 アジアの主婦とメイド雇用(1)、(2)  
翁 和美 認知症患者の社会学(1)、(2)  
森田次朗 オルタナティブ・スクールを事例とした社会学(1)、(2)  
宋 基燦 在日コリアンの民族教育

■哲学基礎文科系ゼミナール  
2011年10月13日～2012年1月19日 毎週木曜日2時限  
検討会 12:00～12:20

■授業テーマ■  
田中一孝 古代ギリシアにおける文芸理論と「芸術」思想  
日高明 「純粋経験」の意義：西田哲学入門  
田鍋良臣・古社匡義 現象学運動の展開と宗教哲学  
濱崎雅孝 「神は死んだ」のか？—ポストモダンのキリスト教

■基礎現代文化学系ゼミナール  
2011年10月13日～2012年1月26日 毎週木曜日5時限  
検討会 18:00～18:20

■授業テーマ■  
杉本 舞 「世界最初のコンピューター」とは？：コンピューティング史入門  
中尾 央 規範と罰の深化について  
富永 望 イギリスからみた戦後天皇制  
小野容照 「野球」を通して考える朝鮮半島の近代

### 事後研修会プログラム

2012年2月23日 吉田南1号館 共106会議室

- 13:30 開会式  
開会の挨拶：FD研究検討委員会委員長 教授 田中毎実  
司会：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈
- 13:35 セッション1：自己紹介  
参加者の自己紹介と公開講座を担当しての感想
- 13:55 セッション2：ビデオ視聴  
講義ビデオの視聴
- 14:10 セッション3：講義の振り返り  
ワークシートを用いた自分の講義の振り返り  
解説：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈
- 14:35 セッション4：学生の声の紹介  
受講生に対するインタビュー結果の紹介  
文学研究科教務補佐員 小城拓理・田林千尋・溝上宏美  
高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之
- 14:55 セッション5：ミニ講義「大学授業をどう創るか」  
高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代  
(休憩)
- 15:15 セッション6：グループディスカッション  
グループディスカッション(30分)  
テーマ1：「学生の多様性にどのように対応するのか」  
テーマ2：「学生をどう授業に巻き込むのか」  
テーマ3：「学びを促す授業デザイン」  
ミニミニ講義(5分)  
テーマ1：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈  
テーマ2：高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之  
テーマ3：高等教育研究開発推進センター 特定研究員 坂本尚志  
グループのまとめ(20分)
- 16:25 セッション7：全体ディスカッション&まとめ  
司会：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈
- 17:00 閉会式  
閉会の挨拶：文学研究科長 教授 佐藤昭裕  
修了証授与：FD研究検討委員会委員長 教授 田中毎実
- 17:15 情報交換会





FD研究検討委員会では、高等教育の動向に関わる情報共有や京都大学内の各部署で取り込まれているFD活動の情報交換を図るために、2011年度に第4回勉強会、第5回勉強会の2度の勉強会を開催いたしました。

## 第4回勉強会

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post04.php>

2011年7月7日(木)、吉田南1号館共106会議室において、昨年度より通算第4回目となる勉強会が開催されました。この勉強会では、各部署で行われている授業アンケートの状況と課題を共有することを目的として行われ、FD研究検討委員会委員を中心に、17部署から19名の参加がありました。

勉強会では、各部署の授業アンケートの現状および課題について報告し合い、そのいくつかの課題についてディスカッションを行いました。また、勉強会に先立ち、各部署の授業アンケートの状況に関する事前アンケートを行いました。その集計結果と、また、各部署で利用している授業アンケートのPDF版は、本勉強会のWebサイト<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post04.php>から参照できます。

京大においても、現在、学部に関しては、全ての学部で何らかの形で授業アンケートが実施されるようになっているなど、授業アンケートはかなり浸透してきています。ただ、授業アンケートの実施方法や課題などについては、各部署でさまざまであることがわかります。しかし、バラエティがあるということは、部署がそれぞれの実情に応じて工夫を講じていることの表れでもあり、むしろ京大らしいところではないかと思えます。授業アンケートも、その実施のサイクルのそれぞれに多様な選択肢と課題を含んでいますので、このような部署間の情報交換を通じて、ときには、ある部分で工夫している他部署から有効な示唆が得られるということもありますし、また、同様のアンケートを実施していることがわかれば、部署間の連携を通して共同実施するといったことで効率化も図れるということがあるでしょう。

授業アンケートに関しては、2007年11月26日にも「授業評価ワークショップ(<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/work.php>)」として、部署間の情報交換の場をもっていますが、今後も、数年に一度、このような機会をもっていきたいと思わせる有意義な勉強会となりました。



## FD 研究検討委員会実施「自学自習実態調査」速報

—京大生ははたして自学自習をしているのか?—

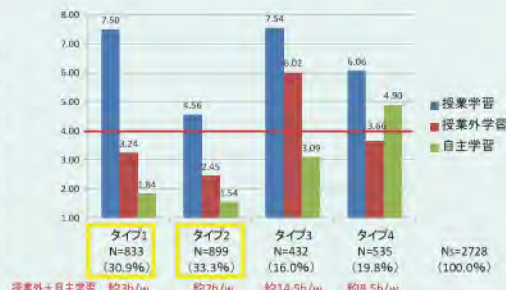
■京都大学では、これまで学生の学習や大学生活等についてさまざまなアンケート調査をおこなってきましたが、1年生から4年生までの全学年を対象とする共通のフォーマットを用いたアンケート調査はおこなってきませんでした。そこで、全体として京大生はどのように学習しているのか、4年間をどのように過ごし成長しているのか、どこでどうつまづいているのかなどについて把握するデータを得るべく、FD研究検討委員会で全学レベルでの「自学自習実態調査」を実施しました。自学自習以外にも、ポケットゼミの効果やキャリア意識などさまざまな関連内容について併せて尋ねています。今回は速報ですので、自学自習の実態だけをご報告します。

■調査概要：KULASISを用いて2011年10月14日～11月11日にかけて実施。回答者数は、1年生1,221名、2年生945名、3年生562名、4年生608名、計3,336名である。回収率は、25.6%でした。

■ここでは1～3年生を併せたデータでの結果を示します。調査では、一週間に費やした平均的な学習時間を、授業に参加した時間（「授業学習」）、授業に関する予習、復習、レポート、課題などの「授業外学習」、授業に関連しない「自主学習」に分けて尋ねました。その回答をクラスター分析でまとめたものが図1です。自学自習タイプはこの図ではタイプ4で、京大生の19.8%が自学自習をやっていることとなります。京都大学と言っても、理系学部によっては自主学習よりも授業外学習が重視されることがあります。ここではそれはタイプ3（16.0%）になります。タイプ4とタイプ3を併せれば35.8%です。全国のデータと比較すると、これらの数字はかなり良いものですが、京都大学の割には時間数はやや短いと思われるかもしれません。

ちなみに、授業しか出ないタイプ1（30.9%）、ほとんど勉強していないタイプ2（33.3%）の存在、あるいはポケットゼミの受講者数が回答者数の半数であること（実際の受講者割合とほぼ同じ）などをもって、さほど学生の偏りはなかったものと考えられています。

学部別にタイプ4とタイプ3の合算値の大小を見ると、割合がもっとも高い学部は理学部（47.2%）、法学部（43.3%）、文学部（40.6%）です。割合の低い薬学部、農学部、医学部は授業が重視される理系学部の特徴を表しているかもしれません。（文責：溝上慎一）



1週間の平均的な活動時間  
 (1)全然ない (2)1時間未満 (3)1-2時間 (4)3-5時間  
 (5)6-10時間 (6)11-15時間 (7)16-20時間 (8)21時間以上

図1 学習タイプ(クラスター分析)

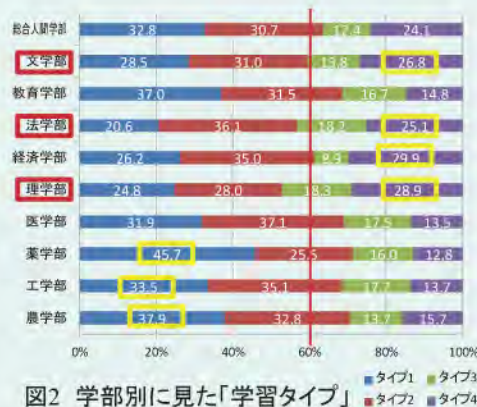


図2 学部別に見た「学習タイプ」

## 第7回工学部教育シンポジウムの実施

平成23年12月2日(金)16時30分～19時00分、桂キャンパス桂ホールにて、第7回工学部教育シンポジウムが開催され、157名の工学部教員及び工学研究科大学院生が参加しました。

16:30～16:35 開会挨拶 (工学部長 小森 悟)

16:35～17:05 話題提供

「最近の大学教育の動向について」

(高等教育研究開発推進センター 大塚雄作・高橋雄介)

17:05～18:05 教育改善に向けて

私の授業アンケート結果を受けてー

1.建築学科 竹脇 出

2.情報学科 奥乃 博

3.工業化学科 安部武志

18:05～18:20 委員長報告

(新工学教育プログラム実施専門委員会委員長 田中庸裕)

18:20～19:00 ディスカッション



小森悟工学部長の開会挨拶の後、高等教育研究開発推進センターの大塚雄作教授および高橋雄介特定助教より、2008年度の中教審「学士課程答申」にまとめられた諸課題がいまだに十分に解決されていない最近の大学教育の状況について、また、本学の2回生進級時アンケート結果より工学部学生についての近年の学習意欲等の推移について話題提供がありました。

続いて、工学部の3名の教員が、学生個々の習熟度を授業中に確認する工夫や学習意欲を向上させるために有効な学生の孤立を防ぐ施策、スライドの途中にレポート問題を挟むなど授業中に学生の注意を引きつけておくための取り組みなどを紹介しました。田中庸裕新工学教育プログラム実施専門委員会委員長は、過去の授業アンケート結果と経年比較によるFD活動と授業改善の効果について考察し、また平成22年度1回生の単位修得状況および平成23年度新入生アンケートの結果を報告しました。最後に、学生の質の変化に教員側がいかに対応してくべきかなど、活発な質疑応答が行われ、大変盛り多いシンポジウムとなりました。



### ◆工学部教育シンポジウムの経緯

1996年、大学院教育課程、国際競争力、達成度判定といったさまざまな角度から工学部の教育を検討し、工学部の教育を改善するという動きのもと、8大学工学教育プログラム委員会が発足しました。これは今もまだ続いている取り組みで、各大学から、産業界からの参加者を推薦していただくことによって、産業界の方々も巻き込んだ教育改善のための議論を展開しています。

2000年には、日本技術者教育認定機構(JABEE)を利用した、技術者教育プログラムの審査・認定評価を受けるための試行などが行われました。この流れを受けまして、京都大学工学部では、2000年に、工学部のFD活動推進の中心的存在として、新工学教育プログラム実施専門委員会を発足させました。

委員会発足直後に行われた特に顕著な取り組みは、2000年から2002年にかけて3年間にわたって行われた、ディベート型の工学部FDシンポジウムです。2回生、3回生対象の専門科目の幾つか、そして工学部の提供する全学共通科目について、学生のアンケートを取ったうえで、学生役、教官役、中立の立場と、役割を担っていただきながら、教育改善のためのディスカッションを行いました。この活動は日本工学教育協会工学教育賞、文部科学大臣賞を受賞しました。

これらの活動を受け、2004年以来、高等教育研究開発推進センターの推進する特色GP「相互研修型FDの組織化による教育改善」と共同して、工学部のFD活動で得られるデータを分析し、工学部の教育にフィードバックする取り組みを継続して行っています。そして、この取組の一環として、2005年以降、年に1回、工学部の授業アンケートの結果をもとに、工学部教育のFD活動と教員相互の研修を目的とした「工学部教育シンポジウム」を行い、工学部の教員・大学院生のための教育改善・情報共有の場を設けるようになっていきます。2007年度より、全学レベルでFD研究検討委員会が発足してからは、FD研究検討委員会の協賛も得られています。

## K.U.PROFILE 公開授業・検討会

### ◆K.U.PROFILEとは

K.U.PROFILEとは、「京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム(Kyoto University Programs for Future International Leaders:K.U.PROFILE:ケーユープロファイル)」を指します(<http://www.opir.kyoto-u.ac.jp/kuprofile/>)。これは、京都大学が国際拠点化大学として行う様々な教育実践プログラムであり、その中の1つとして、学士課程における英語コース(英語で授業を行う課程)の設置があげられます。ここで紹介するのは、この課程に対して行われたFDワークショップである「英語による授業のデザインと実践」です。

### ◆K.U.PROFILE公開授業・検討会

FDワークショップ「英語による授業のデザインと実践」として、授業参観と参観者による質疑応答・ディスカッションという形式で行われました。3つの授業が公開されましたが、ここでは高等教育研究開発推進センター溝上慎一准教授の授業と検討会についてその概略を示します。

日 時：2011年12月22日(木)1時限

授業名：Self Formation in Adolescence  
(青年期の自己形成)

担当者：溝上慎一(高等教育研究開発推進センター准教授)

受講者数：25名(履修者数48名、現在受講者数28名：内訳  
→KUINEP学生(留学生)8名(総人6、工2)、日  
本人学生20名(文系・理系が半数ずつ))

検討会参加教員：7名(うち、外国人教員2名)

### ■授業の概要

青年期のアイデンティティ形成に関する講義(60分程度)の後、授業内容に関する学生同士のディスカッション(30分程度)が行われました。ディスカッションは2~5名程度のグループで行われ、日本人学生と外国人学生が混合のグループでのディスカッションとなっていました。授業、ディスカッションともに言語は英語のみでしたが、受講生は熱心に授業を聞き、また、ディスカッションに参加していました。

### ■検討会の概要

授業後に検討会が行われました(60分程度)。検討会は英語で進められ、本科目を履修している受講生の特徴や日本と外国の学生の違い、溝上先生が授業を進める上で注意している点など、活発な議論が行われました。



## 大学院生のための教育実践講座

### 大学院生のための教育実践講座とは

大学院生のための教育実践講座は、京都大学 FD 研究検討委員会が主催となり、将来、大学教育に携わることを希望している本学の大学院生(PD、研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。

本講座では、初参加者向けの Basic コースと本講座参加経験者及び大学授業経験者向けの Advanced コースの2つのコースを設けています。2011年度で7回目を数え、Basic コースには過去最多の55名、Advanced コースにも17名の参加がありました。

参加者に対して、研修会直後に事後アンケートを実施して、コースに対する満足度を5件法(1:まったく満足していない～5:非常に満足している)で評価してもらったところ、Basic コースは平均 4.25 点(グループ討論: 4.39、ミニ講義: 4.45、ポディワーク: 3.94)、Advanced コースも平均 4.43 点(模擬授業・検討会: 4.43、グループ討論: 4.43)となり、本講座に対する高い満足度がうかがえます。

### 2011年度(第7回)の実施概要

日時 平成23年8月4日(木)10:00～18:30

会場 京都大学百周年時計台記念館 2F

#### 実施プログラム = Basic =

- |         |   |
|---------|---|
| 9時45分～  | 受付  |
| 10時00分～ | 開会式<br>挨拶 理事(教育担当) 淡路 敏之<br>趣旨とプログラムの説明<br>高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作 |
| 10時20分～ | セッション1<br>グループ討論1: (自己紹介)「大学の授業をどう思うか」                            |
| 11時20分～ | セッション2<br>ミニ講義1: 「大学授業の現在」<br>高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈             |
| 11時45分～ | セッション3<br>ランチと自由討論  |
| 13時00分～ | セッション4<br>グループ討論2: 「大学の授業で教師に求められるもの」                             |
| 14時00分～ | セッション5<br>ポディワーク: 「他者とのつながり・自分とのつながり」<br>京都文教大学教授 濱野 清志           |
| 15時40分～ | 休憩  |
| 15時50分～ | セッション6<br>ミニ講義2: 「大学授業におけるガイダンスの重要性」<br>滋賀医科大学准教授 小島 隆次           |
| 16時15分～ | グループ討論整理  |
| 16時30分～ | セッション7<br>全体討論: 「大学で教えるために」                                       |
| 17時30分～ | セッション8<br>ミニ講義3: 「大学で教えるために」<br>高等教育研究開発推進センター教授 田中 每実            |
| 17時50分～ | 閉会式<br>挨拶・修了証授与<br>FD研究検討委員会委員長 田中 每実                             |
| 閉会式終了後  | 情報交換会(18時30分まで)   |



## 実施プログラム = Advanced =

- 9時45分～ 受付
- 10時00分～ 開会式  
 挨拶 理事(教育担当) 淡路 敏之  
 趣旨とプログラムの説明  
 高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作
- 10時20分～ セッション1  
 全体討論1：(自己紹介)「教える側からみた大学授業」
- 11時45分～ セッション2  
 ランチと自由討論
- 13時00分～ セッション3  
 模擬公開授業・検討会  
 教育学研究科 学振PD 井関 龍太  
 理学研究科 研究員 小石 和成
- 休憩 (10分)
- 15時20分～ セッション4  
 グループ・全体討論
- 17時50分～ 閉会式  
 挨拶・修了証授与  
 FD研究検討委員会委員長 田中 每実
- 閉会式終了後 情報交換会(18時30分まで)



## 研修会参加者からの感想 (事後アンケートより抜粋)

### ■Basic コースの参加者より

- ◆自分の大学生活を見つめ直すことができました。色々な方と議論できてよかった。今後の勉強と研究に向けて、自分の将来の道を考えながら、今の自分の身分である学生と将来の目標である教員の関係をもう一度設定し、京大生活を送りたい。
- ◆教育について深く考える時間を得ることができて良かった。このように教育のことだけ考える時間はなかなか得られる機会がない。自分の意見と他人の意見を交換出来て良かった。
- ◆参加型で多くの人と交流しながら実践的に学ぶことができた。
- ◆教員になるという意識がある人達と話せた。大学で研究したいという人の中にこんなにたくさん「教えること」に関心を持った人がいるのが分かった。

### ■Advanced コースの参加者より

- ◆模擬授業が面白かった。大学院に入るとなかなか他の人の講義の仕方を見ることのないし、どういう工夫をしているかという視点で授業を見るとまた新しい発見があった。
- ◆自分が持っていた問題意識やもやもやしていた思いや不安を整理することができ、講義に臨むのが楽しみになった。
- ◆実際に教育を経験された方の体験を数多く聞くことができ、Basic とはまた違う意味で勉強になった。また自分の教育経験が足りないことを実感し、モチベーションの向上につながった。
- ◆授業をしながら1人で悩んで来たことを話合う事ができて良かった。人の講義を聞いてとても勉強になり、授業を良くするアイデアをもらえた。

## 新任教員教育セミナー

### 【新任教員教育セミナーとは?】

新任教員教育セミナーは2010年度の「試行」を経て、本年度から本格実施されました。本年度が2回目の開催となります。このセミナーの目的は、「2010年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している」方々を対象に、<京都大学らしい教育とはどのような教育か>を考え、<そうした教育を行うためにどのような教育サポート・リソースがあるのか><大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか>を知っていただくことにあります。前期の教育経験をふまえながら、全学、部局、個々の授業という異なるレベルで京都大学の教育について理解・議論できるようプログラムを構成しました。研修の様子は京大 OCW (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/center-for-the-promotion-of-excellence-in-higher-jp/05>) にもアップされています。また、当日配布したパンフレット『京都大学の教育サポート・リソース』も pdf でダウンロードが可能です。(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/center/support-resource.pdf>) ぜひご覧ください。



### 【概要】

日時：2011年9月1日(木) 13:00～17:50  
 場所：京都大学百周年時計台記念館  
 参加人数：62名  
 内訳：教授6名、准教授18名、講師11名、助教27名

### 2011年度新任教員教育セミナープログラム

13:00	<b>開会式</b> (司会・進行：高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作) 挨拶 総長 松本 紘 趣旨説明 FD研究検討委員会委員長 田中 每実
13:10	<b>セッション 1：ミニ講義 1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」</b> 理事(教育担当) 淡路 敏之
13:30	<b>セッション 2：ミニ講義 2「京大生の学習と生活」</b> 高等教育研究開発推進センター 准教授 溝上 慎一
13:50	<b>セッション 3：ミニ講義 3「京大の教育的取組」</b> 全学共通教育(ポケゼミ) 少人数教育部会部会長 吉田 純 K.U.PROFILE 国際交流推進機構長 森 純一 文学研究科(プレFD) 文学研究科准教授 出口 康夫 京大の教育サポート・リソース 高等教育研究開発推進センター
14:45	<b>セッション 4：ミニ講義「私の授業」</b> 理学研究科教授 戸部 博
15:15	コーヒーブレイク
15:30	<b>セッション 5：グループディスカッション「京大でどう教え、指導するか」</b> <b>【ディスカッションテーマ / 事例紹介】</b> 1：「アクティブ・ラーニング型の授業をつくる」学情報メディアセンター教授 喜多 一 2：「学力の低下、学生の多様化にどう対応するか？」工学研究科准教授 須田 淳 3：「英語による授業をどう行うか？」農学研究科教授 縄田 栄治 4：「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」経営管理研究部教授 若林 靖永 5：「困難を抱えた学生に向き合うには？」カウンセリングセンター長 青木 健次 6：「博士課程院生のキャリア形成支援」キャリアサポートセンター教授 梅田 幹雄
17:00	<b>セッション 6：ラップアップ</b>
17:50	<b>閉会式</b> 挨拶：FD研究検討委員会委員長 田中 每実

## ■セッション 6 のまとめ「各グループではどのような議論が行われたのか」

セッション 5 では、参加者が 7 つのテーマの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとにグループに分かれてディスカッションが行われました（テーマ 7 は希望者少数につき開講しませんでした）。そしてその結果は「セッション 6：ラップアップ」で報告されました。以下に示したのが、各グループで行われたディスカッションの概要です。



### 1.「アクティブ・ラーニング型の授業を作る」

■議論の中で、必ずしも全ての授業においてアクティブ・ラーニングが必要ではない、ということが明確になった。例えば事例紹介があったポケットゼミの成功例のように、少人数クラスにおいて双方向の授業は大変有効であり、学生にとって有意義であることがわかる。その一方、大人数対象の講義では、双方向性を保つアクティブ・ラーニング型授業は、通常困難であり、例えば、講義中に学生自身に考えさせるために指名しても、学生はなかなか答えられず、双方向性は保てないことが多い。解決策の一つとして、指名する前に自分の考えを紙に書かせた上で発表させる、などの工夫がアクティブ・ラーニング型授業と言える。大学を卒業したら、自分の意見を述べなければいけない場が増えるため、大学生のうちから訓練する必要がある。従って、自分の意見を発言する訓練という面からも、アクティブ・ラーニング型授業の導入はますます必要になっていくと思われる。

### 2.「学力の低下・学生の多様化にどう対応するか」

■現在は学生の指導体制が非常にキッチリしてきている。例えばレポートや本試験を添削して返却している教員もいるだろう。そのような新しい指導にどのようにして取り組むかということを考えなければいけない。また就職志望の学生が大学院生にも多くいるが、彼らに対して、研究へのモチベーションをどうすれば保たせられるのかということも問題として挙げられた。参加者からは、「学生にケアをすればするほど、学生がケアされることに慣れてしまって、さらに教員の負担が増すのではないか」というような懸念が出されたが、事例紹介をされた先生からは「こういう手間をかければ伸びる学生はぐんぐん伸びていくし、自分の研究室に入ってくれることもあるので、決して苦勞ばかりではない」という回答が得られた。一方で、「このような丁寧な指導ができればよいが、教員に対して労力が大きすぎるので、学期末試験やレポートの採点には TA を付ける、というようなシステムを作っていたきたい」という要望もあわせて出された。学生と一人一人向き合えるように教員が努力すること、そして、それを支える体制をつくる必要があるといえる。

### 3.「英語による授業をどう行うか?」

■英語で授業を行う上での課題が何点か出された。まず、テクニカルな問題があるだろう。例えば英語で授業をすることによって情報量が減ってしまったり、専門分野の単語を英語表記するときのやり方だったりということがあげられる。これらの点について、技術的に改善することは可能だという議論になった。例えばスクリーンに日本語を併記するとか、プリントで補足するといったやり方があるだろう。一方で、留学生と日本人が同じクラスに混在することで生じるメンタルな問題として、例えば日本人学生の発言がいつも以上に出てこないという現象も紹介された。この点についても、グループディスカッションの形式をとる、教官の側からも発言を喚起するような雰囲気をつくる、授業後にメールで個別にバックアップして対応していく、という方法があげられた。今回、G30 という事例に関してどのような改善可能性があるのかという点を中心に話が進んだが、根本的な問題として、英語で教えることが重要なのか、内容を相手に理解させることが優先なのか、ということがあり、これは簡単に解決する問題ではないと感じた。一人ひとりの教員が試行錯誤しながら授業を行っていくしかないだろう。

#### 4.「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」

■ソーシャル・メディアを用いる場合に大事なものは、まず授業そのものの良さが第一義的に重要であるということである。授業について考えた上で、双方向性ということを考えないといけない。ただ教壇で質問がありますかと教員が尋ねても、誰も手をあげないということは仕方のないことであり、そこでツイッターをツールとして使うことによって、全員とはいわないまでも、10%から20%ぐらいの学生がツイッターを通して発言をするようになってくれる。このように学生の発言が増えることは、まったく発言のない0の状態よりもよいことだろうと思われる。発言を基にどのような学生がどのくらい授業を理解しているのかを確認することもできる。双方向性を求めるためには、例えばアンケートのようなものを毎回の授業で紙で配って回収するというのもできるが、ツイッターのよいところは、何か疑問に思った時に、それをその場で発言できるということである。リアルタイムでの双方向性が確保できる点が利点としてあげられる。ソーシャル・メディアを使った双方向型授業に関する今後の課題として、情報メディアに対するリテラシーの向上や大学の環境整備があげられるだろう。

#### 5.「困難を抱えた学生に向き合うには？」

■まず事例報告という形で、新入生から大学院生に至るまでの過程と、学生がその中でどのような問題を抱えるのかについて事例が紹介された。まず入学後の問題として、当然個人差は大きいですが、大学生活の中であれもこれもやろうと思いつつ、オーバーペースになって、睡眠・食事のペースが崩れ、鬱の状態に至ってしまう学生がいるとのことであった。このような場合、目標をうまく切り替えて、自己イメージを修正していくことが必要になる。また2回生や大学院生になると、実験など共同で行う研究が始まり、学生の中に対人関係での問題を抱える者が出てくるとのことであった。このような問題を抱えても、周りの友人などには相談

できないケースが多いが、教員にだけは相談できる場合もあるため、教員はそういった相談を受けるという役割を認識しておく必要があるといえる。ただし、専門家に見せた方がよい場合については、状況に応じて必要な機関を紹介する必要があるだろう。学生との向き合い方は学生ひとりひとりの状況に応じて異なるが、彼らが医療機関やカウンセリングセンターを訪れるハードルを下げていくことが重要なのではないかと感じた。

#### 6.「博士課程院生のキャリア形成支援」

■我々は教員として大学院生の進路指導をする必要がある。しかし、アカデミアの道への進路指導は容易にできる一方で、主に産業界のようなアカデミア以外の道への進路指導を行うというのは非常に難しい。その取り組みについては簡単に答えが得るものではないが、大きく3つほど、方向性についての提案が出たので、以下に述べる。第一に、大学院生を産業界に送り込むといったことを考えた場合、彼らにとってアカデミアと産業界といった異なる選択肢がある中で、片方にしか触れる機会がないのはよい状況とはいえない。普段接している大学教員だけではなく、産業界で就職した人間の情報も得られるようにしないといけない。第二に、そのような他領域の方と交流においては、自分の研究の話を行うにしても、幅広くかつ色々な角度から語ることが重要である。従って、学生指導もその観点から行う必要があるだろう。最後に、大学院生は就職にあたってネームバリューの高い企業を求めがちであるが、そのような形で選択の幅を狭めないということがあげられる。名が知れておらずとも実力を兼ね備えており、かつ新戦力を求める企業も日本には数多く存在する。我々教員も産業界のそのような事柄について具体的に知っておかないといけない。まとめると、産学の現実の状況を広く踏まえて指導していけば、博士課程学生のキャリア支援にもなるといえるのではないだろうか。

#### 【新任教員教育セミナーに対する参加者の評価】

##### ■全体の総合評価(回答者52名): 平均値 4.08

(回答者内訳)

1. まったく有意義ではなかった: 0名
2. あまり有意義ではなかった: 1名
3. どちらともいえない: 7名
4. まあまあ有意義であった: 28名
5. 非常に有意義であった: 18名

##### ■セミナーの良かった点

- 分野や年齢の違い(若い)教員の考えや経験をグループ討論を通して知ることができた。
- 他分野の先生方と会う機会そのものがよい刺激になった。貴重なコメントが書いてある小冊子が非常に参考になった。
- 教育ということに大学としてより力を入れていこうとされているんだなと感じました。
- 京大の教育方針等をまとめて聞く機会がこれまでになかったので、大変参考になりました。
- 講義(教育)の仕方については、教育を受けたことがなかったので、参考になり良かった。また、実際に講義をされている先生方が試行錯誤されて得られた知見(意見)についても聞け、参考になった。
- サポートリソースの冊子は役に立ちそう。全学的なプロジェクトの存在があることが分かったこと。
- 教育について、まじめに考える機会になった。

##### ■セミナーの改善すべき点

- 時間がタイトで中身が豊富だったので、すべての内容についていくことが出来なかった。もう少し内容を減らしてもいいのでは・・・。
- 新任向けよりは、全員を対象としてアイデアを交換する場にした方がよいと思う。ワンテーマの研究会にしてはどうか。
- 京大らしい教育とは、何か分からなかった。もう少し分かり易く具体的に示してもらえたらと思った。(抽象的答えはあるが、具体的には答えはない?)
- 新任教員は全員参加にすべきではないか。
- グループ討論のグループ人数を10人以下(6人程度)にしてはどうか。同じテーマのグループが複数あってもかまわないと思う。限られた時間での討論を深めることが難しい。





## 旧高等教育教授システム開発センター及び高等教育研究開発推進センターの 企画による公開授業・検討会

1996～1998年度 第Ⅰ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

	講義名	講師	日時	場所
通年 公開	「ライフサイクルと教育」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育教授システム 開発センター教授	毎週月曜日 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～	楽友会館2階

1999～2003年度 第Ⅱ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

	講義名	講師	日時	場所
通年 公開	「ライフサイクルと教育」 全学共通科目A群※	田中 每実 高等教育教授システム 開発センター教授 ほか 〔リレー式〕	毎週月曜日 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～	楽友会館2階

※セメスター制への移行に伴い、2002年度から「ライフサイクルと教育A」（前期）、「ライフサイクルと教育B」（後期）として実施

■第Ⅰ期・第Ⅱ期公開実験授業プロジェクトの詳細については、

「大学授業のフィールドワーク-京都大学公開実験授業-」（京都大学高等教育教授システム開発センター編 2001年3月 玉川大学出版部）、

「京都大学高等教育叢書19 平成15年度公開実験授業の記録および公開実験事業8年間の中間的総括」（平成16年3月）ほかをご覧ください。

### 2004年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「デジタル制御」 工学部専門科目(3回生対象)	萩原 朋道 工学研究科教授	12月1日(水) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:15～17:30	電気総合館1階 大会議室
第2回	「経済原論ⅡB」 経済学部専門科目	八木 紀一郎 経済学研究科教授	12月7日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:10～13:30	法経0番教室
第3回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育研究開発推進 センター教授	12月13日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第4回	「電気電子工学概論」 工学部専門科目(1回生対象)	大澤 靖治 工学研究科教授	1月11日(火) 5時限 16:30～18:00	工学部 電気総合館3階 中講義室

### 2005年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	松下 佳代 高等教育研究開発推進 センター教授	5月23日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第2回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	大塚 雄作 高等教育研究開発推進 センター教授	6月20日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第3回	「現代制御論」 工学部専門科目 (情報学科3回生担当)	山本 裕 情報学研究科教授	10月20日(木) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:00～13:20	工学部総合校舎 213号室
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育研究開発推進 センター教授	11月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第5回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	米谷 淳 神戸大学 教育推進機構教授	11月 7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第6回	「酵素化学」 農学部専門科目 (食品生物科学科3回生担当)	井上 國世 農学研究科教授	12月14日(水) 1時限 8:45～10:15 検討会 10:30～12:00	農学研究科2号館 応用生命科学専攻 第4セミナー室
第7回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	大山 泰宏 高等教育研究開発推進 センター助教授	12月19日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2006年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	井下 理 慶應義塾大学 総合政策学部教授	6月5日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第2回	「現代の大学・大学生論A」 全学共通科目A群	溝上 慎一 高等教育研究開発推進 センター助教授	7月4日(火) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	吉田南総合館 共25
第3回	「心理学概論B」 全学共通科目A群	大山 泰宏 高等教育研究開発推進 センター助教授	11月21日(火) 1時限 8:45～10:15 検討会 16:20～17:30	吉田南構内 4共21
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	矢野 裕俊 大阪市立大学 大学教育研究センター教授	12月4日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2007年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「教育評価の基礎I」 全学共通科目A群	大塚 雄作 高等教育研究開発推進 センター教授	5月22日(火) 3時限 13:00～14:30 検討会 14:35～15:45	吉田南1号館 共311
第2回	「工学倫理」 工学部専門科目(4回生対象)	水谷 雅彦 文学研究科教授	10月12日(金) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:00	電気総合館中講義室 (吉田ホール)、 電気第2講義室(A1-131) (桂ホール)【遠隔講義】
第3回	「学力・学校・社会」 全学共通科目A群	松下 佳代 高等教育研究開発推進 センター教授	10月25日(水) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:00	吉田南1号館 共206
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	近田 政博 名古屋大学高等教育 研究センター准教授	11月19日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2008年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「生活と環境の化学」 全学共通科目B群	山本 行男 高等教育研究開発推進 センター教授	5月8日(木) 3時限 13:00～14:30 検討会 14:40～15:40	共北25 (吉田南構内)
第2回	「英語ⅡA(E2P02)」 全学共通科目C群	Craig Smith 京都外国語大学教授	6月16日(月) 5時限 16:30～18:00 検討会 18:05～19:00	共西02 (吉田南構内)
第3回	「教育史概論Ⅰ」 教育学部専門科目	辻本 雅史 教育学研究科教授	11月26日(水) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:40	教育学部320 (本部構内)
第4回	「診断治療学総論」 医学部専門科目	森本 剛 医学研究科講師	1月20日(火) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:20	臨床第1講堂 (病院地区)

### 2009年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田口 真奈 高等教育研究開発推進 センター准教授	12月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:30～17:30	共北12 (吉田南構内)
第2回	「診断治療学総論 －医療で求められる コミュニケーション－」 医学部専門科目	平出 敦 医学研究科教授	1月12日(水) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:30～17:30	山内ホール (芝蘭会館)

### 2010年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「心理的ストレスと適応」 全学共通科目A群	及川 恵 高等教育研究開発推進 センター特定准教授	7月20日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:15～13:15	共北12 (吉田南構内)
第2回	「半導体工学」 工学部専門科目	須田 淳 工学研究科准教授	10月5日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:30～13:30	電気総合館1F 大講義室 (本部構内)

---

**2012年3月 京都大学FD研究検討委員会発行**

京都大学のFDに関する取り組みについては、

**FD研究検討委員会のホームページ**

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。

公開授業・検討会を企画される場合は、

**学務部教務企画課(電話 075-753-2430)** まで連絡ください。

---



京都大学のFD

*2011 Mutual Faculty Development*